

國學院大學學術情報リポジトリ

紹介 松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小島, 孝之, Kojima, Takayuki メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000173

〔紹介〕

松尾葦江編『文化現象としての源平盛衰記』

小島孝之

驚くべき本が出た！というのが第一印象である。三十八本の論文と七本の付編から成る七百頁を超える大部の研究論文集ということも驚きであるが、『源平盛衰記』という一つの作品の研究にそのすべてが向けられていることが最大の驚きである。『源平盛衰記』は『平家物語』の一異本である。しかし、同じ『平家物語』の異本と言っても、延慶本とか長門本と呼ぶのは略称で、正式な書名は『平家物語』である。しかるに、『源平盛衰記』はそれが正式の書名であり、もはや『平家物語』ではない。いわゆる読み系本『平家物語』の最も拡大した姿を持つとともに、『平家』から「源平」へと対象も拡大し、独自の世

界を拓いていると見ることもできるのではないだろうか。江戸時代には『平家物語』よりも『源平盛衰記』の方がよく読まれたとも言われるが、しかし、『平家物語』研究史の中では、『源平盛衰記』の研究は立ち遅れていたのではなかっただろうか。そこに出現したこの大冊である。快挙と言わずして何と言うべきか。

書名に、「文化現象としての」と冠している通り、文芸、言語、絵画、芸能、歴史という多角的な方向からアプローチされており、まさに文化としての物語が実感できる。平成二十四年から四年間に亘って実施された共同研究「文化現象として

の源平盛衰記」研究——文芸・絵画・言語・歴史を総合して——の研究成果報告書を兼ねた論文集であるということであるから、むべなるかなであるが、冒頭に述べた通りの多数の論文の集成であるにも関わらず、きわめて自然な感じで問題点が集約されて行くという感覚を抱くのである。論文集であるにも関わらず快い読後感に浸れるといってもよいほどなのである。

さて、具体的に内容を紹介して行こう。全体を共同研究のジャンルに対応して、「Ⅰ 源平の物語世界へ」（文芸）、「Ⅱ 文字と言葉にこだわって」（言語）、「Ⅲ 描かれた源平の物語」（絵画）、「Ⅳ 演じられた源平の物語」（芸能）、「Ⅴ 時の流れを見さだめて」（歴史）の五部に区分し、最後に「付編 資料調査から新研究へ」が付されている。扱われている範囲が非常に広いので、いささか片寄った紹介にならざるを得ないが、私の関心にひきつけて感じたこと、思ったことなどを述べてみたい。

まずは巻頭に置かれた松尾葦江氏による、「源平盛衰記の三百年」という導入論文から読み始めることを勧める。この巻頭論文に、本書全体を貫く問題意識の所在が明解に述べられており、実に簡にして要を得た解説といえるべきであろう。この導入論文によって、『源平盛衰記』研究の現状と課題が鮮明に提示

されており、後続の各論文の位置づけが非常によくわかるのである。そして、各論文はそれぞれ異なる切り口から個別のテーマを論じているのであるが、その結論の多くが、松尾氏の提示した見通しを実証して行く結果になるので、非常に統一感がある。多くの著者の各論の集成である論文集では希有なことではないだろうか。Ⅰには次の十二本の論が配置されている（長くなるのでサブタイトルは省略し、執筆者名を（ ）内に記す）。

1 祇園精舎の鐘致（序章）（黒田彰）、2 『源平盛衰記』形成過程の一断面（原田敦史）、3 『源平盛衰記』の成立年代の推定（大谷貞徳）、4 『源平盛衰記』の山王垂迹説話（橋本正俊）、5 『源平盛衰記』における文覚流罪（小助川元太）、6 頼朝伊豆流離説話の考察（早川厚）、7 『源平盛衰記』の天武天皇関係記事（辻本恭子）、8 『平家物語』に見られる背景としての飢饉（セリンジャー・ワイジャンテイ）、9 与一射扇受諸本文の諸相（平藤幸）、10 『源平盛衰記』における京童部（北村昌幸）、11 『源平盛衰記』と『太平記』（小秋元段）、12 『源平軍物語』の基礎的考察（伊藤慎吾）

以上の各論はテーマこそさまざまであるが、『源平盛衰記』がいかなる物語世界を志向しているのか、あるいは、その志向のよって来たる由縁は何か、といった問題意識に収斂して行

き、『源平盛衰記』には室町以後のかなり新しい後代的要素が多く見られる反面、『平家物語』の初期的な要素もあることが見えてくる。非常に複雑な成り立ちをしていることが具体的に分かってくると、私のような門外漢はこれまで抱いていた単純な先入観が次々に打ち壊され、新たな『源平盛衰記』像が立ち上ってくるという体験を得られるので、その読後は爽快ですらある。

Ⅱには次の六本の論文が並ぶ。1 長門切の加速器分析法による14C年代測定（池田和臣）、2 中世世尊寺家の書法とその周辺（橋本貴朗）、3 古活字版『源平盛衰記』の諸版について（高木浩明）、4 『源平盛衰記』巻第三に収められた澄憲の「祈雨表白」をめぐる（志立正知）、5 『源平盛衰記』語法研究の視点（吉田永弘）、6 源平盛衰記に見られる命令を表す「べし」（秋田陽哉）。

1の池田論文と2の橋本論文はいわゆる古筆切の「長門切」として伝わる断簡を扱っている。長門切は現存『平家物語』の諸伝本のいずれとも一致しない『平家物語』の一異本の断簡であるが、内容的には『源平盛衰記』に最も近似し、あるいは『源平盛衰記』の初期の形態と深く関わるのではないかととも考えられるものである。書名は不明であり、はたして『平家物語』

『語』であつたかどうかも定かではないが、筆者を十三世紀末から十四世紀にかけて生存した世尊寺行俊と伝称されている。橋本論文は長門切の筆法が確かに中世における世尊寺家の書法の特徴を示していることを実証したもので、池田論文はC14の年代測定により長門切の書写年代が一二八四年あたりに絞られることを科学的に実証したものである。この両氏の結論はほぼ共通する時代を指し示しており、その結果はまことに重い。物語などは書かないとされた世尊寺家の筆跡であること、大型の卷子本で、非常に量が多かったと考えられるこの長門切本はいったい誰の注文で、どういう目的で書写されたものだったのか、今のところ手がかりは何もないが、非常に重要な問題を提示していると思う。4の志立論文が澄憲表白と『源平盛衰記』との前後関係を論じている点も、従来の考えかたに対して再考を促すものとなっているが、5・6の吉田論文・秋田論文ともに、『源平盛衰記』にかなり時代の降る語法が含まれることを指摘していることと相俟って、Ⅰの諸論とも連動すると言えよう。

Ⅲには以下の八本の各論が並ぶ。1 軍記物語の奈良絵本・絵巻（石川透）、2 水戸徳川家旧蔵『源平盛衰記絵巻』について（工藤早弓）、3 寛文・延宝期の源平合戦イメージをめぐる（出口久徳）、4 寛文五年版『源平盛衰記』と絵入無刊記整版

『太平記』の挿絵(山本岳史)、5舞の本『敦盛』挿絵考(宮腰直人)、6屏風絵を読み解く(小林健二)、7久留米市文化財収蔵館収蔵「平家物語図」・「源平合戦図」について(伊藤悦子)、8平家納経繡出品・観普賢経の見返絵と『源平盛衰記』の交差(相田愛子)。

ここでは、1の石川論文と2の工藤論文が同じ物を組上に載せる。石川論文が的確な見取図を描き、工藤論文が細かく具体的に分析して、両論相俟ってたいへん理解しやすい。工藤論の、「安定した体制のもと源氏将軍家の流れに連なるとする徳川武家政権の歴史的必然を意味付けるものだった」という指摘は、絵画の分野を超えて広く適用できそうな指摘として心に残った。

IVには次の六本が配置されている。1「平家物語」の「忠度都落・忠度最期」から展開した芸能・絵画(岩城賢太郎)、2小袖を被く巴の造型(伊海孝充)、3君の名残をいかにせん(玉村恭)、4狂言「文蔵」のいくさ語り(稲田秀雄)、5土佐少掾の浄瑠璃における軍記の利用方法(後藤博子)、6浄瑠璃正本における「平家」考(田草川みずき)。

以上の各論はおおむね芸能の側が軍記に取材した享受の問題を扱っているが、2の伊藤論文は『源平盛衰記』の方が能の演

出を撰取した可能性のあることを指摘している点が特に心に残った。

Vの歴史関係には次の六本が位置する。1治承・寿永内乱期における和平の動向と『平家物語』(川合康)、2『源平盛衰記』の史実性(曾我良成)、3『平家物語』にみえる夢の記事はどこからきたのか(松蘭斉)、4和田義盛と和田一族(坂井孝一)、5『山田聖栄自記』と平家物語(高橋典幸)、6静嘉堂文庫蔵賜蘆本『参考源平盛衰記』の注釈姿勢(岡田三津子)。

すでに与えられた紙数を超過しており、一々について触れないが、それぞれが史実との関係を問うているのはやはり歴史家の立場が反映されていると言うべきであろう。

最後に、付編として、写本・版本等の資料の詳細な研究とテキスト一覧等が収録されて今後の研究のための多大な便益を提供している。

以上、きわめて雑駁で駆け足の紹介に終始してしまっただが、この空前絶後とも言うべき論集が今後の研究の呼び水となつて、一層深く広く『源平盛衰記』の研究が進むことを大いに期待したい。(A5判、七二八頁、笠間書院、二〇一五年五月刊、定価一五〇〇〇円+税)